
幸福な記憶

宮森琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福な記憶

【Nコード】

N6893A

【作者名】

宮森琥珀

【あらすじ】

二一トの青年・楓は、ある雨の夜に死にかけの子犬と出逢う。不思議な声に導かれ、一日の延命と人間の体を得た子犬に楓は「幸せ」を教えることになる。幸せとは何なのか、楓は懸命に考える。果たして楓は子犬に「幸福な記憶」を与えることが出来るのだろうか？

1：拾う

俺は世間一般で言うところの駄目人間だ。

大学は無事卒業したものの、就職に失敗。アルバイトを探し、フリーターとして生活していたが、つい一ヶ月ほど前にクビになった。フリーターですらなくなった俺は、実家に転がり込んだ。ネオンで彩られた街並とは縁の無い片田舎だが、自室に引きこもってオンラインゲームに現を抜かす身にそんなことは関係ない。パソコンとインターネット環境さえあれば生きていけるニート。世の大人達が顔をしかめる身分まで、俺は堕ちたのだった。

*

*

*

*

そんな変わり映えのない日々を送っていた、とある雨の日。夕刻と夜の境目に、愛読している雑誌を買いにコンビニに行った俺は、帰り道で古ぼけたダンボールを見つけた。人気のない公園の入り口付近に、ポツンとそれは置かれている。ゴミ捨て場でもない場所にある不審物に、俺は興味本位で近づいた。この御時世、爆発物がポツンと放置されていてもおかしくはない。下手すると不審物に近づいたせいで命を落とすかもしれない。だが、それならそれでいいと俺は思った。むしろ面白いとまで考えた。それほど俺は、この毎日がどうでもいいものだと感じていたのだ。

しかし、箱の中には予想しなかったものが入っていた。

「……犬」

つい呆然と呟いてしまう。愛犬家が増加し、動物虐待などに敏感になっていくこの時代に、ダンボールで捨てられている犬に遭遇するとは思ひもなかったのだ。

「まだ、子犬じゃないか」

生まれて間もないのだろう。手の平にすっぽりと収まるほどの小さな命は、今にも息絶えようとしている。消えそうに儚い鼓動が俺の手の平を震わせた。クーン……と雨音に掻き消される小さな鳴き声が切ない。この犬は、間もなく死ぬだろう。家に連れ帰って温めてやったとしても、きっと手遅れだ。それでも何故か、俺はこの犬を離し難かった。

途方に暮れていると、不思議な響きの声が聞こえてきた。

「青年よ、よくお聞きなさい」

周囲を見渡しても誰もいない。ただ静かな住宅街があるだけだ。首をかしげる俺に、柔らかな声音はなおも語りかけてくる。

「青年よ、その子犬は『幸せ』というものを知りません。辛く悲しい記憶だけを抱いて死のうとしているのです。余りにも、哀れではありませんか。私は、この子に一日の時を与えましょう。その間に、この子犬に『幸せ』とは何か、あなたが示してあげてください。幸福な記憶をあげてほしいのです」

突然、辺り一面に眩い光が満ち溢れ、たまらず俺は目を瞑る。優しい囁きが耳元をくすぐった。

「……頼みましたよ」

閉じた瞼に刺激を感じなくなつてから、俺はおそろおそろ目をあけた。目の前に、やせっぽちの幼い少年がいる。そして、胸に抱いていた子犬は消えた。ずぶ濡れになつた少年の無垢な瞳が、全てを物語っている。

子犬は人間の姿と、僅かな時間を得たのだ。

2：染みる

「まあ、楓！可愛いお客さんね」

ひとまず少年の手をひいて家に帰ると、玄関まで出てきた母親が破顔した。彼女は大の子供好きなのだ。事情があつて友人の弟を預かることになったのだと言うと、母はあっさり騙されてくれた。

「そうなの。いらっしやい、僕、お名前はなんていうのかしら？」

少年はきよとした表情で母を見上げている。元が犬なのだから、言葉が分からないのだろう。帰宅途中に何度も話しかけたが、少年は一言も発しなかった。だからといって、名前がないのはまずい。とはいえ、ポチなどと安易な名前はつけられない。

「……タロウ。こいつの名前はタロウだよ。人見知りがひどくて、めったに話さないんだ」

「まあ、そうなの。困ったちゃんね、太郎くんは」

言葉に反しちつとも困っていない母は、愛しいものを見る目で子犬の少年の靴を脱がせている。ポチもタロウも余り大差ない気もするが、つけてしまったものは仕方が無い。タロウの方がやや人間味があるだろうし。まあ、どうせ一日だけなんだ、と俺は軽く考えていた。

「楓。太郎くんをお風呂にいれてあげなさいな。ついでにあなたも入っちゃいなさい。さっき沸かしたばかりだから、いいお湯加減のはずよ」

そう言い残し、タロウの頭を撫でてから母は台所へと立ち去つてゆく。それを見送る少年の腕を引き、俺は風呂場へと向かった。

風呂から上がった頃には、タロウは言葉を発しないものの、表情をコロコロと変えるようになった。それはとても無邪気で、純粹な可愛いものだった。そして、嬉しそうに笑う顔のなんと多いことか。真新しいタオルの匂いをかいだ時、母が笑いかけた時、目の

前に並ぶ平凡な家庭料理をきよろきよろと眺める時。そんなことが嬉しいのかと思ってしまうような時に、澄んだ薄茶の瞳は喜びの色に染まり、きゅっと細められるのだ。

しかし、その表情を見るたびに、俺の心には苦い何かが溜まってゆく。俺には「子犬に幸せを教える」という役目がある。そのことを、子犬の笑顔が思い出させるからだろう。

幸せとはなんだろう。

そんな疑問が胸に浮かんでは消え、消えては浮かぶ。こうして何気なく夕食を摂っている間にも、タロウの残り時間は減っている。とても一日で出せる答えではないのに、その結果を子犬に示さねばならないのだ。

幸せとは、一体なんなんだろう。

金持ちであること？健康であること？美しい容姿を持っていたり、素晴らしい特技をもっていること？望みが何でも叶うこと……？わからない。そんなこと、俺が知りたいくらいだ。そもそも、俺はどんな時に幸福を感じているのだろう。覚えがない。自分が分からないことを、どうやって他人に教えるというんだ。

隣に座る小さな横顔を眺める。タロウは、丸い目を輝かせながら卵焼きを頬張っていた。食器を思うように使えない少年に、母が根気よくフォークに食べ物を刺しては手渡している。そんな光景が妙に胸に染みて、俺は思いきり米を頬張った。

3：語る

夕食後に帰宅した父を交えて、母はタロウに昔の俺の写真を見せようとした。笑顔でアルバムを広げようとする彼女を、やんわりと制止する。母ばかりか父も不思議そうに首をかしげた。実の所、なぜアルバムをタロウに見せたくなかったのか自分でもよく分からない。嬉しそうに父の膝に乗って母に頭を撫でられている子犬を邪魔したくなかったのかもしれない。しばらく皆で談話して（といっても、タロウは終始にこにこしているだけで一言も話さなかったが）十時を過ぎた頃、タロウは目を擦り始めた。眠いのだろう。

「あら、もうこんな時間。楓、あなたの部屋に布団を敷いておいたから、太郎くんと一緒に寝てあげてね」

「たまにはお前も早く寝なさい。夜更かしは健康に悪いぞ。じゃあ太郎くん、おやすみ」

穏やかな表情の両親に、タロウは満面の笑みで手を振った。

いつもだったら、部屋に入った瞬間にパソコンの前に座る。それがごく当たり前のことになっていたのだ。しかし、どうしてか今日は全くそんな気がしない。パソコンが視界に入っても、特に何もする気にはならなかった。ベッドの横に綺麗に敷かれた布団にタロウを導く。きょとん、としている小さな体を横たえた。

「ここで寝るんだぞ」

言っても分からないだろうから、枕に頭を乗せてやり、布団をかけた。ふんわりとした寝具の上からポンポンと軽く叩く。

「おやすみ、タロウ」

子犬は瞼を閉じようとしないう。何か言いたげな瞳でジッと俺を見ている。見つめ返しているうちに、ハラリと記憶の糸のひとつがほどけた。ああ、覚えがある。幼い頃に「おやすみ」と促されても素直に目を閉じられないことがあった。眠くなかったわけじゃないのに、そのまま微睡みの世界へ入りたくなくて。そんな時、母は……。

俺は無言でタロウの横に寝転がった。不思議そうな顔をする子犬の柔らかな髪を不器用な指で梳きながら、俺はボソボソと呟き始めた。

「むかしむかし、あるところに……」

寝たくないともうがる俺に、母は怒った顔ひとつせず、優しく昔話をしてくれた。その妙に安心感を与える声音に耳を傾け、物語に夢中になっていくうちに寝てしまい、翌日に続きを聞かせるとせがんだものだ。さして面白くもない話に夢中になれたのは、そこに温かな気持ちを感じたからだろう。犬に言葉は通じない。けれど、気持ちはきつと伝わる。どちらかというと聞き心地の悪い声に、それでもタロウはとろとろと眠り始めた。いつしか繋がれていた掌の温みに誘われて、俺もそのまま瞳を閉じた。

翌朝、カーテンの合間から零れる一筋の光に起こされた。俺にピトリと体を寄せている小さな体とその安心しきった寝顔を見て、思わず口元が緩む。残された時間はあと十時間ほど。俺は課せられた宿題をクリア出来るのだろうか。段々と膨らむ不安を意識しないようにして、そっとタロウの体を揺すった。

4：戯れる

焼き魚、白米、味噌汁、煮物という純和風の朝食を済ませて、俺とタロウは外へ出た。初夏の爽やかな陽の光に、二人して目を細める。過激に暑いというわけではないが風も生温く、すぐにじんわり汗ばんでいく。俺はタロウの手を引き、歩き始めた。

向かった先は公園。俺達が出逢った側の、あの公園だ。今の時間帯は、まだ幼稚園にも通わない幼児と引率の母親がいる。子犬を遊ばせるには丁度いい場所だろう。目的地では既に数人の子供達が戯れ、母親達が世間話に興じていた。そこにはある種のグループ意識が働いているように思え、公園内に入ることに多少の戸惑いを感じる。俗に言う「公園デビュー」をする親子はこんな思いを抱くのだろうか。そろそろと踏み入ると、いつせいに視線がこちらに向けられる。思わず固まってしまいが、相手側に特に悪意は感じない。珍しいものを見る、そんな眼差しだ。

「お散歩ですか？」

連中の中では年上の方に思われる女性が話しかけてきた。頷きながら、俺達は近づく。

「はい。あの、コイツもあの子達と一緒に遊ばせてやってもいいですか」

母親たちは笑顔で快諾してくれるが、俺はもう一言付け加えなければならなかった。

「あの、コイツ言葉を話せないんです。大人しいんで悪さをしたり乱暴したりはしないと思うんです、けど……こっちの言うことも分からないし、喋れないんです」

拒否されるのではと恐る恐る口にした言葉に、母親達はやはり一様に笑顔だった。一番最初に話しかけてきた母親がゆったりと言う。「大丈夫。子供達は心で通じ合えるんだもの。さあ、一緒に遊んでらっしゃいな」

タロウを連れて子供の集団に近づくと、一人の女の子が泥まみれの手で子犬を引っ張っていった。他の子供達もみんな満面の笑みで初めは緊張していたようだったタロウも段々と打ち解けたようだ。新緑の合間を楽しげに駆け回っている。木陰のベンチに座りながら俺はその光景を眺めた。

そして、ハハリ。また記憶の一端が甦る。そうだ、こんな記憶が確かに俺にもある。世界の何もかもを美しいと感じられた幼い日、母に手を引かれてこの公園に来た。毎日、同じメンバーで同じ遊びをする。今ならば笑い飛ばしてしまう稚拙な遊びが、とても楽しかった。満たされていた。

……それは、幸せ？

頭をフツとよぎった考えに、身震いした。昨日、俺はなぜタロウにアルバムを見せなくなかったんだ？もしかして、それは「幸せな記憶」がたくさん詰まっているからではないだろうか。すぐに消えゆくタロウに幸せを見せつけるのは酷だ、と無意識に思ったのではないか。

無邪気に駆け回るタロウを見つめる。なあ、お前は今幸せか？ほんの一瞬だったとしても、幸せだと言えるのか？不意に涙が出そうになって、グツと上を向く。一面の青だった。眩暈がしそうなほど、突き抜ける青空。雲ひとつないこの青が朱に染まり、夜闇に溶けてしまう頃にタロウは……。俺には信じられなかった。あの笑顔が消えてしまうことなど、信じられなかった。

一時間ほど経つと、昼ごはんの支度があるからと公園の仲間達は次々と帰っていった。満足そうにしているタロウの手を洗わせながら、腕時計を確認する。あと、七時間。残されているのは余りにも少ない時間だけれども、たくさんの記憶をあげよう。少しでも多く、幸せな記憶を。生まれてきたことを決して悲しまないように。命を得たことを喜べるように。

5：辿る

バスに乗り駅前まで出て、デパートに行った。都会では大型スーパーくらいの規模だが、地元では一番栄えている百貨店だ。中学にあがった頃から、とんと訪れることはなかったが、昔と何も変わらない。飲食店が並ぶ階まで登り、ファミリーレストランに入る。昼時にもかかわらず、平日だということもあってか待たずに案内された。

珍しそうにきよろきよろと視線を巡らせるタロウの前にメニューを広げる。自分の顔を指差してからランチセットAを指す。その後、タロウの顔を指差して、首を傾げて見せた。俺はランチセットAを食べるが、お前はどうか？という意味を含ませているのだけれど、上手く伝わるだろうか。何度か繰り返されるそんな行動をジッと見つめていたタロウは、おずおずとお子様ランチを指した。一番彩りが鮮やかで、目がひかれたのだろう。頷いて「わかった」と伝えるから、オーダーした。

幼い頃の父との思い出の大部分は、このレストランだった。仕事に追われ多忙だった父と一緒に食事をとれるのは、週末の夜だけだったのだ。日頃から溜まっていた父に話したいことをぶちまける俺を、父は優しく見守ってくれた。寡黙で時には厳しい父を嫌うことがなかったのは、彼はきちんと話を聞いてくれる人だと知っていたからかもしれない。

母がしていたようにタロウの食事の世話をする。スプーンやフォークに食べ物を乗せ、握らせた。昨日に比べて随分と器用に動く小さな手。その小ささが悲しかった。

あの不思議な声は、タロウには幸せな記憶が無いのだと言った。一体、どんな生活をしていたのだろうか。タロウはひとりぼっちで捨てられていた。生まれてすぐに兄弟と引き離されたのだろう。母の存在を知らぬまま、孤独に震えていたのかもしれない。小さな命

の存在を、誰か祝福してくれたのだろうか。誰か、ほんの一人でも「おめでとう」と「生まれてきてくれて、ありがとう」と伝えてあげたろうか。

無意識に、子犬の頭を撫でていた。目を丸くする少年に構わず、何度も撫でた。俺は良かったと思うよ。お前が生まれてきて良かった。そんな想いを知ってか知らずか、タロウはにんまりと笑った。口の周りをケチャップで赤く汚しながら、それはそれは嬉しそうに

レストランを出た俺達は屋上に昇った。港からの潮風が吹き付けるそこには小さなアミューズメントコーナーがある。子供を遊ばせながら、親は休憩スペースで一息つけるという場所だ。

鮮やかな色使いの遊具の数々にタロウの目が輝く。特に小さなメリーゴーラウンドを熱心に見ている。係員に代金を支払い、子犬の手を引いてラウンド内に入った。軽い体を抱えて、一緒に白馬に乗り込む。ほどなくしてメルヘン調の曲が流れ、ゆっくりと馬が回転し始めた。緩やかに上下に動きながら、景色が回る。柔らかな風と風景の流れに、目を細めた。

前に抱えているタロウの表情は見えないが、きっと楽しんでいるだろうという確信がある。その昔、俺も楽しんだからだ。俺は未だに子犬に幸せを伝える術が分らない。だから、同じ記憶を与えようと思った。せめて人並みの日常を経験させようと考えたのだ。緩慢な動きで回転木馬が静止する。興奮した様子のタロウを抱え、俺は次のアトラクションへと向かった。

6：消える

散々遊び尽くしてデパートを出る頃には、空にだいぶ赤味がさし
ていた。屋上でアイスクリームを買った時にもらった黄色い風船を
手に、タロウは実に満足そうだった。それにどこか安堵しながら、バス
に乗り込んで家へと向かう。隣で眠たげに目元を擦るタロウと自分
の腕時計とを交互に見ながら、俺は冷や冷やしていた。「一日」と
いうのが二十四時間という意味ならばあと少し時間がある。まだ、
消えない。一緒に家に帰るくらいの猶予はある。もしかしたら神が
気まぐれをおこして、このままタロウを生かしておいてくれるかも
しれない。そんな都合のいいことを考えて、俺は小さく息をついた。

最寄のバス停で降りて、家路を急ぐ。空が藍色へと染まるにつれ、
俺の不安も高まってゆく。あの公園を通りかかり、しばし足を止め
た。俺は早く帰りたいかったのだが、タロウが足を止めたのだから仕
方ない。

少年はジッと公園を見つめていたが、不意に俺を見上げて微笑ん
だ。昼間、子供達と遊んだことを思い出したのだろうか。タロウの
視線に合わせて屈む。

「友達と遊んで、楽しかったか？」

タロウは微笑んだままだ。

「俺の家と一緒に過ごしたり、デパートで遊んだりして、楽しかつ
たか？」

子犬はじつと俺の顔を見つめ、抱きついてきた。眠くなって歩く
のが嫌になったのだろうか。幼い子には、体力的に厳しいスケジュ
ールだったのかもしれない。しっかりと抱き支えて立ち上がった拍
子に、遠くでキラリと輝いて流れるものが見えた。

「タロウ、流れ星だぞ！」

その方向を指し示すと、頬が触れ合うほど近くにあるタロウの顔

が綻んだ。

可愛らしい笑顔に俺は油断したのだろう。再び視線を夜空に戻した。

その瞬間、ふわりと風船が舞い上がった。

風船を握っていたはずのタロウがない。最初、タロウがうつかりして手を離れたのだろうと思った。だが、そのタロウが俺の腕から消えている。……消えた？

俺は慌てて手を宙に伸ばした。しかし、黄色い風船はまるで月のように、遠くの空へと行ってしまった。それを見送りながら、呆然と膝をつく。

一日って言ったじゃないか。まだ二十四時間も経っていない。サヨナラも言っていないし、まだ確かめていない。アイツが幸せだと思えたのか、確認していないのに。

俺は立ち上がり、全速力で自宅へ向かった。タロウは、ふざけているだけかもしれない。俺を驚かせようと、先に帰ってしまっただけかもしれない。そうだ、きっとそうに違いない。勢い良く玄関に飛び込んで、荒い息をつく。奥から出てきた母親が笑顔で首をかしげた。

「おかえりなさい。あら、太郎くんは一緒じゃないの？」

おっとりとした残酷な言葉。俺は玄関にへたりこんだ。母親が不審そうに尋ねてくる。

「楓、どうしたの。太郎くんは？」

「……かえったよ」

「そう。残念ね、一緒にご飯食べようと思っていたのに。また遊びに来てくれるといいわね」

「来ないよ」

「ええ？」

「ずっと、もう……二度と来ない！」

タロウの魂は天国に還ったのだから。続けられなかったその言葉を胸の中で噛み締め、零れた涙を見られまいと自室のある二階へと駆け上がった。

7：悟る

月明かりが降り注ぐ自分の部屋には、タロウの布団がまだ残っている。母が綺麗に整えてくれたのだろう。起き抜けの汚い状態ではなかった。その上に寝転がってみると、微かに子犬の匂いがする。そう認識して、俺は涙を流しながら呻いた。柔らかい布団を握り締め、歯を食いしばって。後悔とも懺悔ともいえない想いをたぎらせる。

「泣かないで」

唐突に声が響いた。昨夜、俺に子犬を託した声だ。ハッと顔を上げて周囲を見渡すが、何の姿も見えない。

「青年よ、泣くのはおよしなさい。あの子が心配しますよ」

「俺……っ、たいしたこと、できなかった。幸せなんて、幸せなんて……！」

口を動かすたびに涙が溢れる。喉が張り付く感じがして、思うように話せない。そんな俺を宥めるように声は言った。

「幸せを、確かに感じましたよ。あの子は幸せでした」

そんなはずがない。大きく首を振っても、声は全く動じず、穏やかに先を続けた。

「あの子の最期の笑顔を覚えているでしょう。なんとも幸せそうな笑顔を」

幸せ？あの笑顔が幸せだったというのか。

「あなたにとつては些細なことでも、あの子には大きな喜びだったのです。体をお湯で清め、満腹になるまで食事をし、温かな布団で夢見ることが出来た。友達と遊ぶことが出来た。そして、名前をもらい、優しさに触れ、常にあなたが手をひいてくれた。……それは、とても大きな幸福な記憶となったのですよ」

思えば、タロウはいつでも笑顔だった。どんな時でも、小さな幸せを拾っては喜んでいた無垢な魂。俺が過ごしてきた当たり前の日

常から、幸福を探し当てた小さな掌。そして、笑顔。

俺は体を折り、むせび泣いた。何がどう悲しいのかも分からぬまま、ただひたすらに涙を流した。不思議な声は、もう泣くとは言わなかった。ただ「ありがとう」と残して、二度と聞こえなくなつた。

*

*

*

*

一ヶ月が経った。俺は今、保父の資格を取ろうと講習に参加したり、勉強プログラムを組んだりしている。タロウは死んだ。あんなにも綺麗な命は散った。でも、俺は生きている。ならば、精一杯に頑張つて生き抜かねばならないと思つたのだ。もがきながらも、迷いながらも、命を粗末にするような生き方をしてはいけなさと悟った。生きたくても生きられない人もたくさんいる。そんな人の分まで、俺は満足のいく日々を重ねようと考えた。どうでもいい、などと二度と思わないように。

なんでもない日々に、ささやかな喜びで微笑む。それは、とても幸せなことなのだ。そして、幸せを見逃しながら幸せを探し求めて生きる人間とは、何と愚かで、何と幸福な生き物だろう。様々な命が散りゆく中で、そんな滑稽な姿を暢気に晒すことを神に許されているのだから。タロウと出逢い、別れたことで俺は思い知った。

以前の俺のような人間は決して少なくないだろう。無気力に生きているようで、その下には押し潰されそうなほどの不安を抱えていたり、漠然とした苦しみを感じたりする。そんな時には思い出して欲しい。どんな些細なことでも、幸福な記憶を。それを礎に生き抜いていけるだろうから。

この広い空の下、確かに俺たちは愛され、祝福されている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893a/>

幸福な記憶

2010年10月8日15時50分発行